論説

得宗領・笠和郷内梨畑について

佐藤未喜

＊はじめに

弘安八年（一二八五）に成立した豊後国図田帳は、別名大田文とも謂われる土地台帳であるが、内成はその図田帳に笠和郷内梨畑として、はじめて一級史料に出てくる。中世期に内梨畑または内梨子村と呼ばれたこの地域が、どのような過程を経て北条家得宗領となったのかについて考察する。

（Ⅰ）内成の地名語源

本題に入る前に内梨畑の地名由来についてふれる。

内成の語源は「内梨→内成」すなわちウチナシ→ウチナリの転訛であると考えるが、もともとの「内梨」の語源について地名用語語源辞典（楠原祐介著）によれば

○うち〈内、打、裡〉

①ウチ（内）で「内側」の意。とくに「入り込んだ地形」、「山谷の小平地」

②ウチ（内）は、血族的集団を意味し、「氏」と同語源か。

③入江、入海の湾内

④フチ（縁）の転か。→ふち。

⑤ウチ（打）で、崖などの「切り取られたような地形」をいうか。オチ（落）の転とも考えられる。→おち。

⑥鹿、猪などの通る道。

⑦ウナ・チ（接尾語）の略か。→うな。

⑧強意の接尾語

○なし〈成、梨、生、無〉

①接尾語。「～になった所」の意。動詞ナス（成）の連用形より。～

②ナラシ（平）の転で、「平坦地」、「緩傾斜地」をいうか。→ならし。

③ナシ（無）の意で「～のない所」をいうか。

④ナシル（擦。「当ててこする」）の語幹で、「こすられたような地形」、すなわち「崩壊地形」を示すものもあるか。

とある。

地名の語源の殆どが地形を基にした自然地名であることか

ら筆者は、

「ウチは内側の意で山間の入組んだ所を指し、ナシはナシル（擦）の意で、こすられたような地形・崩壊地形、を表わす自然地名」であると思う。

村の一番高い所・石城寺から眺めれば、平均勾配十分の一の棚田が一面に広がっている。まさに擦られたような地形であり、この村の景観を見事に表現した地名であることが理解できる。

（Ⅱ）弘安図田帳の読み方

原文は漢文で「内梨畑、大略為畠地、代不分明、地頭相模四郎左近太夫殿」

読み下すと「ほとんどが畠のため、田代は分からない。地頭は得宗家である」ということになる。この原文を先学はどのように解釈しているか各史書の記述を以下に紹介しよう。

①大分県史（中世編Ⅰ・P四〇八、竹内弘文氏）

「図田帳に地頭相模四郎左近太夫殿とみえる。執権時頼の子、相模四郎宗政の子・師時にあてられる。内梨畑は現在の挾間町と別府市の境界にある内成にあたる。「大略為畠地、地代不分明」とあるこの土地がどうして得宗領（大友史料八の二一八）となったのかわからない。笠和郷地頭大友氏が得宗家へ嫁いだ女子に譲った土地であろうか。」

②大分の歴史（中世・P三一九、渡辺澄夫氏）

「内梨畑、地頭相模四郎左近太夫殿

今の別府市大字内成に当たる。大分川の支流賀来川の上流の石城川流域一帯で戦後大分郡挾間町から別府市に編入した。地頭職は北条時頼の子、相模四郎宗政の子師時である。笠和郷は今の大分市の中心部を占め国府のある荏隈郷に接する。もともと国衙領であったと思われるが、図田帳では徳大寺中納言家を領家とする荘園となっている。地頭は大友頼泰が帯して守護領となっているのは荏隈郷と同様である。当地が北条氏一門領となった時期、経緯など一切不明である。」

③日本歴史地名大系

「相模四郎については諸説があるが、北条師時と考えるのが妥当か。永和元年（一三七五）九月二日の足利義満袖半

下分（大友文書）によると、得宗領であった「内梨子村」などの地頭職が勲功の賞として大友親世に与えられている。永徳三年（一三八三）七月十八日の大友親世所領所職等注進状案（同文書）では「内梨子畑」と記されているので、内梨子村と内梨子畑（内梨畑）は同一地域をさし、豊前と豊後を結ぶ街道の要衝の地として得宗領となったと考えられる。」

④角川・日本地名大辞典

「後藤碩田は相模四郎は「吾妻鏡」文応二年二月条に見える尾張左近太夫将監公時に比定しているが（大友史料三）、名越公時については、名越尾張入道と記す箇所があるので否定される。北条師時とする説が正しいと思われる。相模四郎が内梨畑の地頭となった時期、経緯は不詳。応安八年、肥後国菊池郡水嶋陣における大友親世の軍功に対して、永和元年九月二日恩賞として内梨子村などが足利義満によって宛行われた。これによると、得宗領とある。この地区が大分郡と速見郡を結ぶ要衝の地であったため、得宗領となったものであろう。永徳三年七月十八日の親世所領注進状案には「同国内梨子畑」と見え、内梨子畑は内梨子村とも呼ばれていたことがわかる。以後大友惣領家領として存続したと考えられるが、史料がない。近世は府内藩領内成村となる。」

⑤別府市誌（飯沼賢司氏）

「内梨畑は現在の別府市字内成と大分郡挾間町大字内成に比定されている。先の史料から鎌倉時代は北条氏の惣領である得宗の所領であったが、北条氏滅亡に伴い没収され、南北朝時代の末には、勲功の賞として大友親世の手に渡ったことが明らかとなる。弘安八年段階の地頭は北条時頼の孫師時に当てる説が有力である。しかし、師時の通称は武蔵四郎であり、相模四郎は師時の父である宗政の通称である。弘安八年では、師時は十一歳の少年であり、元服をしていたとは思われず、まだ童名を使用していた可能性が高い。とすれば、図田帳の記載は「相模四郎」は「相模四郎跡」すなわち相模四郎宗政の子孫と書かれていたものが「跡」が脱漏したという見方もできる。いずれにしても地頭は師時とみてよいだろう。（中略）

内成は鶴見山の尾根が大分郡方面にのびた上に展開する村であり、水には恵まれていたが、川はなく、湧き水を使

用して山の上に水田が開かれた。鎌倉時代は（ほとんど畠であるので、田数は不明である）と書かれているように、一面に畠が広がる景観であったと思われる。（中略）しかし、それにしてもほとんど水田がないこのような畑作地帯の内梨子がなぜ北条得宗領に組み込まれたのであろうか。生産という面からみれば、価値の高い所領とは到底考えられない。得宗領の特色として海上交通・陸上交通の要衝をその所領に組み込んでいる点が従来から注目されているが、この内梨畑も交通上の要衝の視点から考えるしかない。」

⑥九州諸国における北条氏所領の研究（石井進氏）

「弘安図田帳に「内梨畑、大略依為畠地田数不明、地頭相模四郎左近太夫殿」とある。相模四郎左近太夫は得宗家傍流の師時であろう。」

これら六誌に共通する認識は

（Ⅰ）地頭は得宗家の北条師時である。

（Ⅱ）生産高の少ないこの地が、いつ・なぜ得宗領になったのかは不明であるが、理由の一つとしては交通の要衝説があげられる。

ということになる。（Ⅰ）についてはいまや定説とみてよい。（Ⅱ）について筆者は違う見解を持っているが、それについては後記、内成の生産高で述べる。

＊相模四郎・北条師時

ここで地頭に比定される相模四郎・北条師時について触れる。

師時（一二七五～一三一一）は当時三番引付頭人であった宗政（通称相模四郎）を父として生まれた。母は連署北条政村の女で、当時の二番引付頭人時村の妹である。図田帳の弘安八年に十一歳で叙爵している。正安三年（一三〇一）従兄貞時の後任として二十七歳で第十代執権に就任。応長元年九月三十七歳で病没。八代執権で伯父にあたる時宗の猶子（養子）でもあった。父宗政（一二五三～一二八一）は文永九年廿歳で評定衆に就任、翌十年三番引付頭人に進み、建治三年二十五歳で一番引付頭人となったが弘安四年二十九歳で没した。相模四郎と呼ばれ、二月騒動（文永九年・一二七二）で名越時章が誅殺された後の筑後守護職を引き継いだが、このとき同時に内梨畑の地頭職も確保したのではないかと思われる。系図で示せば以下の通りである。

時頼（六代執権）
- 時輔（相模三郎・六波羅南方）
- 時宗（八代執権）――貞時（九代執権）
- 宗政（相模四郎）――師時（十代執権）
- 時教
- 宗頼（相模七郎）―宗方（母大友頼泰女）

＊足利義満袖半下文

時代は少し降るが内梨子村（内梨畑）が得宗領であったとする史料として足利義満下文をみてみよう。

「下　大友式部丞親世

可令早領知、豊後國佐賀郷得宗領・同國大佐井郷同領・同國内梨子村同領・同國朝見郷内立石村古庄信濃守跡・同國朽網郷半分朽網次郎・同與三左衛門入道跡・同國球珠郡内綾垣村綾垣掃部亮跡等地頭職事

右、為勲功之賞、所宛行也者、早守先例可致沙汰之状、如件

永和元年九月二日　」

（大友文書　・大分県史料二十六）

永和元年（一三七五）、当時九州探題であった今川了俊の献策に応じて、大友親世に恩賞として与えられたものである。今川貞世（了俊）が引付頭人から九州探題に起用されたのは、応安三年（一三七〇）六月、当時九州は懐良親王を頂く菊池以下の南軍の全盛期で、筑前・筑後・肥後・豊前を制して、北朝側の豊後の大友は孤立していた。

了俊は息子の義範をあらかじめ高崎山に入れて菊池軍をおびき寄せ、長防の守護大内氏を味方につけるなどの施策が奏功して北軍の態勢を優勢にしていった。永和元年八月、菊池軍の本拠肥後を攻めるために、水島に陣を張った了俊は、九州の三豪、少弐冬資・大友親世・島津氏久の来援を求め、酒席で少弐を刺殺した。水島の役といわれるものであるが、この事件がもともと守護層に根強い探題不信を燃え上がらせ、島津は離反し了俊は窮地に立った。この危機に大友を陣営に引き止めるために上記の地頭職を与えたものである。下文に内梨子村同領とあるように得宗領であり、弘安図田帳で得宗家に譲られていた内梨畑が大友家に返還されたわけである。

以後は大友家滅亡まで支配が続いたものと思われるが史料的確証がない。ただ雉城雑誌は当地の正八幡宮（大神峰神社）の項で

「建久四年、大友能直若宮ヲ勧請シ、且、宗麟、義鎮當村ニ於テ水田幾許ヲ社領ニ寄附セラル。然ルニ、天正丙戌ノ兵火ニ寺社共ニ亡ブト云々。是當社ノ伝記ニ載スル処ニシテ、建久六年記スル処ノ縁起一巻アリ。」と、宗麟の頃の支配状況を伝承として紹介している。

(Ⅲ) 得宗領・内梨畑

内梨畑は笠和郷に属し地頭は大友惣領家であった。その内梨畑が北条氏一門に渡ったのは、強要か寄進のいずれかによる。鎌倉幕府成立初期には、北条氏の権力はいまだ確立していたわけではなく、所領を強要できるほどの力はなかった。北条氏一門の所領拡大の経過をみていくと、承久の乱が大きな意味を持っていることがわかる。治承・文治の内乱によって平氏没官領となったのは五百余所であったのに対し、承久の乱によって鎌倉幕府が獲得したのは、おおよそ三千余所にものぼる。義時が行賞を執行するに当たり姉・政子の意向を反映して御家人への給付を重視したため、北条氏は二十ケ所程度の所領確保にとどめたといわれる。奥富敬之氏は「承久の乱は、東国武士政権の京都貴族政権への勝利というだけにはとどまらなかった。それは、なによりも、北条氏の一般御家人たちに対する勝利でもあったのである。こうして、のちの得宗専制政権樹立という方向に対する経済的基盤は、ここに成立した。あとはこれらの所領を一門庶子に配布しつつも、全体として統括して、もって軍事的政治的権力に換えてゆく仕事だけが残されていたのである。」(鎌倉北条氏の基礎的研究)と総括しておられる。大友氏側に没収されるほどの落度もないのに、北条氏一門に譲られたのは、大友惣領家の女子(娘)が嫁入りした際の贈与と考えるのが妥当である。図田帳の時期・弘安八年(一二八五)以前の大友・北条両家の婚姻関係を見てみよう。

①能直の娘

宗家大友氏之系図によれば

能直(一一七二〜一二三三)
- 親秀(一一九五〜一二四八)―頼泰(一二三三〜一三〇〇)
- 女子　名越々後入道之妻女

尾張守、備前守、左近太夫、修理亮母也

とある。また大友田北氏系図ではさらに詳しく

「名越越後守平朝時室、尾張守光時、備前守時長、修理之亮時幸等之母儀」

となっている。奥富敬之氏によれば、朝時と大友能直女の間には、光時（越後守）・時章（尾張守）・時長（備前守）・三浦義村女・時幸（修理亮）の四男一女があった（鎌倉北条一族）。

名越朝時は建久四年（一一九三）に生まれ、寛元三年（一二四五）に没。父は二代執権・義時（一一六三～一二二四）で三代執権・泰時（一一八三～一二四二）の弟、名越流の祖である。時政以来の名越邸を相続し、自ら「名越」を名乗っているように、自分の系統こそ真の北条氏の惣領家であるという自負があったとみられている。朝時以来得宗家に対抗したために数度の討滅を受けることになる。寛元四年（一二四六）の宮騒動に際し嫡子光時は、「我ハ義時ガ孫也。時頼ハ義時ガ彦也」と嘯き、あからさまに時頼の執権就任に対抗し敗北、伊豆に流された。このときは許された弟時章・教時は文永九年（一二七二）二月の二月騒動で時宗に討たれ名越家は没落した。北条氏内部では名越家は得宗家に対抗しうる高い家格を有し、これがために得宗家と争い、結果討滅を受けることとなったとみられている。筆者はこの名越家への嫁入りに際して贈与されたと考えている。

②親秀の娘

大友田北氏系図（大友史料三二号）によれば

親秀 ─ 頼泰
　　└ 女子　相模三郎平資時入道真如室

とある。また大友入田氏系図では「北条三郎平資時入道真照室」、大友系図では、「相模三郎資時入道真如室」とあり、北条資時の妻女とみて間違いない。資時（一一九九～一二五一）は北条時房の三男で、三十九歳で北条氏としては初めて評定衆に就任（一二三七年～一二五一年）。五十一歳で引付衆・三番引付頭人（一二四九年～一二五一年）を勤め幕府の重鎮であったが五十三歳で没。資時には一子時成があるが子孫を残さず断絶したようである。父時房は時政の三男、義時の十二歳下の弟にあたり、北条氏内部では最も傍系に位置したとみられている。

なお相模三郎を称するものに時宗の異母兄・時輔（一二四八～一二七二）があるが、彼の妻は小山出羽前司長村の娘であること、次にみる頼泰の娘が時輔の異母弟・宗頼に嫁入りしていることなどから、ここで謂う相模三郎は資時とみて間違いない。最傍系の資時への嫁入りに際し得宗家へ贈与された

とは考えにくい。

竹本弘文氏は井田郷（大野郡）についての記述の中で

「図田帳に地頭職相模三郎入道母女子とあり、相模三郎入道とは北条時輔（時宗の弟、六波羅探題）という。大友田原系図（入江文書）に、大友親秀の女子に、相模三郎入道室が見えるから、この女子との間に生まれた女に伝領したものか。」（大分県史、中世編Ⅰ・P四〇四）と書いているが、ここでいう相模三郎入道は明らかに北条資時のことであり、時輔としているのは誤りである。また時輔を時宗の弟としてあるが事実は異母兄であり、文永九年（一二七二）の二月騒動で誅殺された時は二五歳、年齢的にも時輔は一二四八年生に対し親時女は生年不明であるが、長兄の頼泰が一二二二年生であるところから推測して時輔よりもかなり年長に当たることは確実であり婚姻の対象とはなりにくい。

③頼泰の娘

大友宗家系図では

頼泰 ─ 親時（一二三六～）
　　└ 女子　相模守修理亮崇頼室宗方母

とあるが、大友入田氏系図では、「北条修理亮平氏宗頼室」となっている。北条氏一門で「崇頼」というのは存在しない。宗方の父であれば五代執権・時頼の子、宗頼に該当する。「崇」は「宗」の誤字であろう。

宗頼は建治二年（一二七六）正月、周防・長門両国守護として下向、現地で豊後守護大友頼泰の娘を娶り、弘安元年（一二七八）その腹に次男宗方（一二七八～一三〇五）が生まれたが翌二年長門で没した。宗頼の兄は八代執権・時宗（一二五一～一二八四）であり、宗政・時教の実弟、異母兄に時輔がある。図田帳の相模四郎は兄・宗政であるから時期的にも宗頼への輿入れの贈与にはそぐわない。飯沼賢司氏が言うように正しくは「相模四郎跡」とすべきであるとすれば、内梨畑の地頭職を通称相模四郎・北条宗政が握っていたことになる。宗政は文永九年（一二七二）には二〇歳で評定衆に上っているから、弟の宗頼が大友頼泰の女を娶る以前に、すでに内梨畑の地頭であったと思われる。

以上にみてきたように初代能直から三代に亘って、北条氏一門と婚姻関係を結んでいることは注目すべき大友氏の対幕府政策であると思われるが、三つの事例を比較検討してみれ

ば、①の名越朝時への譲渡が最も合理的であると考えられる。

石井進氏によれば

「（十三世紀前半代）この頃、筑後・肥後両国の守護職は、多分大友氏の手から北条氏一門の名越時章（一二一五～一二七二、母大友能直女）に移動し、時章は以前から相伝していた大隅国守護職とあわせて、一人で三カ国の守護職を兼任することになった。すでに時章の父朝時に対して、かれが守護であったわけでもない豊前国で所領寄進がなされていたことからも察せられるように、北条氏一門内における名越氏の勢力は大きかったのである。」（九州諸国における北条氏所領の研究）

という当時の状況のもとで、内梨畑は名越側からの要請があってのことかも知れないが、婚姻を理由にむしろ大友家の方から寄進したのではないかと思われる。時期は嫡男・光時の生没年が不明であるが、次男時章が一二一五年の誕生であることから一二一〇年頃ではないかと推測される。

その後前述した「二月騒動（文永九年・一二七二）」で時章は誅殺され、三カ国守護職は没収、筑後国は時宗の弟宗政、肥後国は得宗、大隅国も金沢氏一族の時直が守護職に就いた。こうして九州の守護職に関する限り、かつての名越氏の勢力が壊滅し、得宗および得宗傍系が進出している。筆者はこの「二月騒動」のあと、内梨畑の地頭職が北条宗政（通称・相模四郎）を経て、父の死後師時に渡ったのであろうと推測している。

得宗領の拡大がどのように進められたのかについて、奥富敬之氏は

「承久の乱以後も、北条氏の所領は、ますます増大していた。だいたいの傾向として、時頼の時期に東北地方に向けて得宗の手が伸びており、時宗の時期には、元寇を契機として、西国に大きく及んで行ったようであり、両時期を通じて、将軍家の関東御領の得宗領化が進行したというように見られている。個々の徴証を提示した実証的研究が、この時期のものに関しては、まだなされていないので、なんとも云えないが、おおまかなところ、そのように思われる。」（鎌倉北条氏の基礎的研究）

と書いているが、おおむね定説とみていい。大友能直の女が名越朝時に嫁入りした一二一〇年代前半には、幕府内における北条氏の地位が確立していたとは言い難く、建暦三年（一二一三）の和田氏の乱を制し，承久の乱（一二二一）に勝利して漸く二代執権・義時の幕府における立場が確立した

のである。

北条得宗家が所領拡大の動きを本格的にはじめるのは、承久の乱以後のことであるといえよう。

それにしても、大友能直はなぜ北条・名越氏に寄進したのであろうか。当時幕府における大友氏の立場は微妙であったと思われる。頼朝の「無双寵仁」として重用された能直は頼朝の死後の、後ろ盾とも言うべき養父・中原親能の死は彼の立場を弱くしたと思われるが、筆者は畠山重忠誅殺事件に関連して、能直の妻・深妙の出自にも関係するとみている。

＊尼深妙の出自について

「続群書類従・巻一五〇」によれば大友能直の妻を畠山四郎重範女とするものと、高山四郎重範女とするものの二説がある。両氏のうちいずれであるかは確認されていないが、高山氏は畠山氏の一族ではないかという説もある（外山幹夫氏）。四郎重範が同じであるところから、筆者は高山は畠山の誤字で、畠山重範の女であると推測しているが、いずれにしても畠山・高山両氏とも秩父平氏の一族であり同門であることは疑いを容れない。元久二年（一二〇五）畠山重忠が義時に誅殺される事件は、大友能直にとって北条氏との関係を再構築しなければならない重大な契機であった。妻の実家に繋がる一族が北条氏によって滅亡させられたのである。女の一人を名越朝時へ嫁がせたのは、北条氏を慮っての対策であろう。このとき内梨畑は化粧料として名越家に譲渡されたのである。

深妙は九十歳以上の長寿を保つほど強健な体力を持ち、能直との間に九男三女を設け、能直没後の所領分与に深く関与しているが、延応二年（一二四〇）女子二人に配分した所領は

女子犬御前分
同庄内中村地頭職

女子美濃局分
同庄内上村半分地頭職　在別注文

となっている。

大友氏系図によれば能直には三人の女があるが、美濃局は山上中将娘とされた人物に当てる説が有力である。系図上で彼女は「玖珠女房云々、山上中将娘直親母、将軍所杉密局」とあり、外山幹夫氏は「美濃局は、その局を称しているところから恐らく末女で、山上中将娘とされた人物であろう」と述べている。（大名領国形成過程の研究）

犬御前とは善刑部太夫の妻女であろう。芦刈政治氏は、大野能基略系図で犬御前の娘・珍阿と戸次重秀との婚姻関係を推定し、さらに能基の女の一人を善修理亮広衡妻に当て、善氏との関係を示唆している。（大分県史、中世Ⅰ・P一三九）以上の推定の結果、名越越後入道の妻女となった女には、所領の配分がないことになるが、これは先に輿入れの際内梨畑を譲渡しているからとすれば整合性のある処置と納得がいく。

大分県史によれば弘安図田帳に見る得宗家の所領は、内梨畑のほか

（ア）佐賀郷　一五〇町
（イ）井田郷　八十町五段
（ウ）臼杵荘　二〇〇町
（エ）日出津島　七十町
（オ）石垣荘別府　六十町
（カ）安岐郷・成久名　三七町
（キ）田染郷・吉丸名　二一町

ということになる。

これらの中で名越氏一門領と考えられるものは、（オ）石垣荘別府と（キ）田染荘・吉丸名であり、能直の娘が名越朝時に嫁するに際し内梨畑ともども所謂化粧料として寄進されたものと考えられる。

（Ⅳ）交通の要衝説

内成が交通の要衝であったということについて飯沼賢司氏は別府市誌に

「江戸時代の日田代官所と大分の高松代官所を繋ぐ永山布政所路は由布院を越えて、御嶽権現の前から東山に入り、由布川渓谷の西にある尾根にある朴木地区を降り、野田に出て大分に至る。古代の道もこの尾根の先端に国分寺があることから古くからの道が存在したと思われるが、御嶽権現の道は志高方面を抜けて、内成を通り、来鉢を経て大分方面に至る道も古くから存在していると考えられる。この道は別府の朝見から鳥越峠を越え高崎山の裏を抜けて、国府に出る官道と内成地区を通る道で連結されており、内成はふるくから交通上の要衝であったと推測される。」と具体的に書いている。

筆者は古代の豊後道や豊前道の経路について、石城川の道（歴史資料・石城川村）で考察したが、その要旨は以下の通

りである。

（一）古代の豊後道のルートは近世の永山布政路とほぼ同一であり、豊後国府（府内城）からの経路は、赤野→朴木→捏山→由布駅（川上）→荒田駅→石井駅（日田代官所）→大宰府である。

（二）豊前道は古代には、国府（高坂駅）→赤野→七蔵司→銭亀峠→長湯駅→安覆→宇佐→到津の経路であったが、銭亀峠への経路が中世期には大友氏の高崎山城への近路として府内城→由原神宮→銭亀峠のルートに変わった。

（三）内成（内梨畑）は豊後道の捏山と豊前道の銭亀峠を結ぶ間道にあり、この間道は宇佐神宮と由原神宮および府内城、豊前と豊後国府を結ぶ最短コースであった。また鳥越峠を下れば田野口の宝満寺を通り別府の中心地へ繋がっていた。

（四）銭亀峠にある亀形の巨石に「東府内道・北別府道・西ゆふいんみち・南どうじり道」と刻まれているが、この「西ゆふいんみち」が石城寺の前を通り内成を貫通していた。

以上の地理上の状況から、内梨畑の要衝に当たることが一目判然とするが、交通の要衝は又一面で経済的な利点がなければ得宗領たる価値がないであろう。得宗領は交通の要衝を押さえていると指摘されているが、例示される門司関や佐賀郷（佐賀の関）などの海上交通の拠点とくらべてみると、内梨畑の場合の要衝度はかなり低いといわざるをえない。

交通の要衝という理由だけで、生産高のない所領を寄進したというのは説得力に欠けるのではないか。実は内梨畑は相応の生産高の見込める豊かな地域であったと筆者はみている。

（V）内梨畑の生産高

「大略依為畠地、代不分明也」を解釈すれば飯沼賢司氏が言うように「ほとんど水田がないこのような畑作地帯の内梨子がなぜ北条得宗領に組み込まれたのであろうか。生産という面から見れば価値の高い所領とは到底考えられない。」ということになるであろう。

＊棚田の性格

しかしながら、日本の棚田百選にも選ばれた、見事な棚田の広がる内成の現地に立ってみれば、村の一番高い所・石城寺の麓に豊富な湧水源がある地形上の利点を活かして、早くから水田化されていただろうことは想像に難くない。筆者は、「内成の棚田はおそくとも中世中期には開発されていた」と主張しているが（内成の棚田について・別府史談第一九号）、その根拠の一つとして海老沢衷氏の説を紹介しよう。氏は「荘園公領制と中世村落」で

「（迫田型の棚田は）十三世紀以降荘園史料でも確認できるもので、狭い谷間を這うように上る棚田である。水量の多い湧水点（イノコがある場合に発達したものとなる。多くの場合湿田であり、中世には安定した収量を見込める水田として領主の直轄田となる場合もあった。B型（迫田型）の棚田が発達しているところには、必ず中世以来の寺庵があり、石造文化財や古屋敷の存在が確認できる。」と解説しているが、内成の景観はまさにこの記述にぴったり当てはまる。しかしながらこの海老沢説は一般論であって、これを援用して内成には中世に棚田があったと即断するわけには行かないが、可能性の高い見解であると思われる。

＊山麓湧水地帯

原田信男氏は近著、「中世の村のかたちと暮らし」の中で、関東平野東半部の現地調査をもとにして中世の村落景観を分類して、「古代からの安定的な村々は、①山麓型と②乾田低地型の村々である。つまりもっとも水田開発がしやすく、人々が住みやすかったところが、豊富な湧水をもった山麓部と水流をもちながら乾いた低地部であった。もちろん古代においても、こうした安定的な部分にのみ人が暮らしたのではなく、さまざまな地域で生活が営まれたが、水田農業という観点からは、このふたつがもっとも好ましい地形条件下にあった。」とし、さらに「こうした山麓型の村々においては、山からの湧水を利用して水田の確保が容易であったことから水田率が高く、低湿地周辺部を除けば排水条件に恵まれるため、下田率が低くなるという傾向を示す。いずれも安定的な水田が得られた地域で、古くから主要な武士団によって開発が進んだ。」と書いている。ここでいわれている山麓型の村の景観は、小鹿山を背景にして、村の一番高い所にある石城寺の豊富な湧水をもつ内成の地形条件に見事に一致する。

＊豊後国郷帳

内成の生産高を確認できる最古の資料は、正保四年（一六四七）に成立した豊後国郷帳（正保郷帳）であるが、それによると

日根野織部正領分

高　四百九拾弐石四斗七升三合　　笠和郷

内　三百三拾八石六斗壱合　　田方　　内成村

百五拾三石八斗七升弐合　　畠方　　木山有

となっていて、田方（水田）が多く生産力の大きい大村であることがわかる。この石高のゆえに府内藩中郷内成組として大庄屋が配置されていたのである。内成の水田はその全てが棚田である。棚田の生成には長い年月を要するということは、中島峰広氏等の研究で明らかになっている。氏が宮崎県諸塚村で行った調査では、一九四〇年代に人力とカルイ・カタクチ・唐鍬などの簡単な作業用具のみによって実施された棚田造成作業において、一〇a当たり延べ四〇〇人前後を必要としたことが確認された。諸塚村では各戸平均三三aの棚田がひらかれるのに一〇〇年以上の年月がかかっている。昭和の十年代の現代でもこうであるとすれば中世の状況下では、人口も少ないゆえさらに条件は悪いであろう。内成村の正保郷帳にみる田方・三百三拾八石余の生産高は、一朝一夕にして出来たのではなく、こうした長い年月の経過の産物である。前にも述べたが、内成の水田は全て棚田である。水田であるとすれば棚田となり、畠であれば段々畑という文字になる内梨畑の地形の特質が図田帳の表現に影響しているのではないか。

小出博氏の紹介によれば、中国では段状になった耕地を梯田と呼んで田と畑を区別せずに用い、日本における棚田と段々畑のような使い分けがないとのことである。弘安図田帳における「大略依為畠地」の畠地にはそのような厳格な区別はなかったのではないか。

「豊後国図田帳」は豊後守護大友頼泰宛の関東御教書に基づいて、頼泰が注文作成の上幕府に報告したものであるが、その内容については「此状者無四度計候、追進之時、可被取替候」と頼泰自身が記すように、かなり杜撰な記載がみられる。「大略依為畠地代不分明也」も調査不十分の印象が拭えない。

＊畠作の重要性

「大略依為畠地」を字義通りに理解して水田はなかったと

しても、中世期における畠作の生産力は考慮されねばならない。

黒田俊雄氏は「蒙古襲来」の中で

「それは一まとめにいえば、中世の農業生産力の発展は水田耕作よりは畑作を主とし、そして畑作の発展、畑作物の加工・販売が弱小農民の自立の基礎になったというものである。」と畑作の意義について問題提起を行なっている。

網野善彦氏は「日本中世土地制度史の研究」で畠作研究の重要性を指摘しているが、氏の「水田中心史観批判」は、日本の土地制度とそれに伴う税制が、水田のみを賦課対象にしてきたという、いわば虚構の上に立っていることを論じている。

また坪井洋文氏は「イモと日本人」で、木村茂光氏は「ハタケと日本人」で畠作の重要性について論じているが、もともと古代国家が畠地を把握の対象とみなさなかったこともあって、残された史料が少なく事態に迫ることはかなり難しいのが実情のようである。しかしながら原田信男氏のように「中世において、畠地の持つ意味が決して軽いものではなく、水田を上回る存在であった」と説く史家もいる。

畠作の重要性は今後の研究に期待するとして、内梨畑の場合は豊富な湧水を利用しての水田農業が古くから行なわれていたと思われるのである。

(Ⅵ) 結論

内梨畑は大友能直の女が名越朝時に嫁入りする際化粧料として持参したものである。その時期は、次男名越時章の生年が建保三年（一二一五）であるところから推測して承元～建暦年間（一二一〇年頃）と思われる。その背景として頼朝亡き後の大友氏の立場、特に北条氏との関係強化を迫られたからである。

この間の主な事件を年表にすれば

正治元年（一一九九）　源頼朝没
元久元年（一二〇四）　源頼家、修善寺で殺される
元久二年（一二〇五）　畠山重忠父子誅殺（能直妻の実家）
承元二年（一二〇八）　養父・中原親能没
建保元年（一二一三）　和田氏の乱（能直の母方の縁戚）

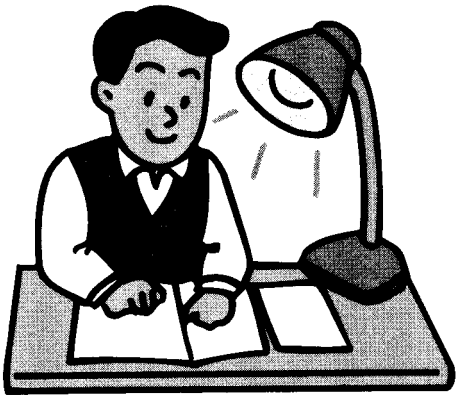
頼朝没後、北条氏が権力を増殖していく過程で、「無双寵仁」と謂われるように頼朝との結びつきが深かった能直の立場は微妙であった。妻・深妙の実家に繋がる畠山父子が誅殺され

た事件や後盾であった養父・中原親能の死は北条氏からの不安にどう対処すべきかを能直に問いかける契機であった。この危機に際し能直は北条氏一門との政略結婚に活路を開こうとしたのである。

名越朝時への譲渡はこのような政治的背景の中で行なわれたのであって、生産高にみるべきもののない荒廃した畑地を、陸上交通の要衝という一点のみで寄進することなどは能直には到底出来なかったであろう。内梨畑は名越氏への化粧料として相応の生産高を持つ所領であったのであり、このことは後年の正保郷帳によって明らかにされている。内梨畑の地頭職は、名越朝時→名越時章→北条宗政（相模四郎）→北条師時と変遷して得宗領として幕末まで続き、鎌倉幕府瓦解後は没官されていたが、足利義満によって大友親世に返還されるという経過を辿る。重ねて指摘するが先学諸氏の見解は交通の要衝という面に力点が置かれ過ぎて、内梨畑の生産力の高さが等閑視されていると筆者は考えている。

事務局より

当会では、皆様の研究成果を広くお読みいただき、会員のお互いの研究を深めたいと考えています。ぜひ原稿をお寄せ下さい。



詳細は122ページの「『別府史談』原稿募集について」をご覧下さい。